

図書館だより

第 4 号

昭和 53 年 3 月 15 日

愛媛大学附属図書館

目	次
○読書法のすすめ…………… 1	○文章・表現・文体・研究のために…………… 7
○パイプ役四年間を顧みて…………… 2	○お知らせ…………… 8
○雑学雑想…………… 3	愛媛大学記念文庫について
○「鈴鹿文庫」の設置について…………… 3	定年退官の教官および
○貧乏学生にとっての図書館…………… 4	卒業生の図書館利用について
○司書講習を受けて…………… 5	和雑誌目録の配布について
○医学部図書館（新築）平面図…………… 6	○編集後記…………… 8

読書法のすすめ

—板倉氏の「私の読書論」に感銘して—

教育学部長 堀 越 和 衛

「ばねにおもりをつるしたとき、ある長さまでのびて止まるのは、おもりの重さとばねのちぢむ力が等しくなったときである。このことから、おもりの重さとばねのちぢむ力とは、つり合っているということが出来る。ばねのちぢむ力は、おもりが下に引くのに比べて、向きは反対である。」これは某社の小学校六年生の理科の教科書の一節であるが、「重さ」「作用・反作用」「力のつり合い」等の概念が明確でないために、非常にわかりにくい。

「本を読んでよくわからなかったら、自分の頭が悪いと思うな。その著者の頭が悪いと思え。」（板倉聖宣：私の読書論，ひと，Vol. 1，No. 10，1973）同感である。本を読んでよくわからなかったら、同じようなテーマの本を集めて読み比べてみるのがよいと思う。

私は幼稚園や小中学校の科学教育という観点から子どもむけの科学読物を読むことが多い。そして、専門書以上に、本質的なことがやさしく書かれていることに驚くことがある。これは、私の頭の程度が低いせいかと思っていたが、これも上述の『私の読書論』の中で板倉氏も「科学や学問の

本質を知ろうと思ったら、専門書よりも一般むけの概説書・啓蒙書や子ども向きの本を読んだほうがよい。」と言われている。わが意を得たりの思いである。

私は子どもの頃、相馬 御風氏の「良寛さん」「一茶さん」「西行さん」、賀川豊彦氏の「一粒の麦」「死線を越えて」、最近では板倉聖宣氏・高橋金三郎氏などの書物をかたっぱしから読んでいた。「すきな著者をおいかけろ。」という板倉氏の読書法にも非常に共鳴する。

「科学の最大の真理は、実験的研究の末梢の細部に根をおろしている。」（クロード・ベルナル）＜実験医学序説・三浦訳・岩波文庫＞これはある研究会機関紙の表紙に書かれている高橋金三郎氏の引用文であるが、こんなすばらしい文章を発掘できる高橋氏の勉強ぶりに頭がさがる。

「おもしろいと思った引用文・引用文献があったらそれをたどれ。」これも板倉氏の言葉であるが、すばらしい読書法の一つの発見だと思う。

板倉氏の読書法に感銘するままに。

（教育学部教授・理科教育）

パイプ役四年間を顧みて

図書館長 蒲 池 文 雄

2期4年にわたる館長の任期もこの3月末日で満了となるので、この4年間に館長として考えたこと、体験したこと的一端を記してみたい。

図書館長としてまた図書館として何を為すべきかを考える際には、遠い目標と近い目標を考えておかなければなるまいと思う。そして、常に遠い高い目標を目の片すみに入れながら、さしあたっては近い目標の達成に努めるのが現実的だと思う。というのは、高い目標を掲げることはむろん必要であるが、国立大学の附属図書館が置かれている現状を考えると、高い目標の追求というだけでは、現状は一步も前進せず、空理空論に終わるおそれがあるからである。

その意味で、私は、館長としての私のさしあたっての任務を、図書館と研究者、図書・情報を収集、整理、提供する側と、それを求める側とのパイプ役となること、言い換えれば、図書館とその利用者とのコミュニケーションをよくすること、と考えることにした。

そういう私の考えを形に現したものの一つがこの館報の発行である。(むろん、館報の発行は他の国立大学図書館との交流、図書館員の研修などの意味もあるが、最大の目的は前述の点にある。)まだ、いわゆる“3号雑誌”の壁を乗り越えたばかりで、内容はもとより、速報性や配布の方法など問題は多いが、何といても利用者との交流という点では大きな力を持っているので、今後ともみなさんのご協力を得て、役に立つ館報に成長していったらいいと切に願っている次第である。

ところで、図書館と利用者とのパイプ役を志した私だが、こと学生の実態把握という点では一つの誤算があった。それは、今の学生を自分たち昔の学生と同様に考えていたことから来たものだった。ことの次第はこうである。本年度の授業開始にあたって、私は国文学の授業に出た52人の学生(2・3回生)に対して、“図書館に関するアンケート”なるものを示し、無記名で回答を求めた。アンケートは14項目にわたるものだが、その結果を見て特に私が驚いたのは、学生諸君が開架図書はよく利用しても、書庫内の図書はほとんど

利用していない、という点であった。すなわち、“書庫内の本を借り出したことがありますか。”という問いに対して、(a)たびたび 0%, (b)ときどき 1.9%, (c)まれに 11.5%, (d)ない 86.5%という数字が出たのである。こういう学生たちが、“図書館の本を検索するためのカード目録としては図書館にはどんな種類がありますか。”という問いに対して正しい答えが出せなかったのは当然である。なぜこんなことになったのか。それは、現在の大学生は、小・中・高で図書館の利用指導は昔よりずっといいに受けて来ている。しかし、それらの学校図書館はすべて開架式であるから、そこで受けた教育は大学図書館の利用にすぐには結びつかなかった、というわけである。このことは前から全く予想されないことではなかった。しかし、実態調査でこんなはっきりした数字がでるとは思わなかったのである。

実は、卒業するまで図書館の本は開架室にあるものだけだと思っていた人があるという話は聞いていたので、昨年はテスト・ケースとして一部の新生を書庫内に案内し、目録カードによる検索法を教えたが、ことしは、上の体験にもとづき、各学部のご協力を得てできることならば、新生全部を(少なくとも昨年より多くの学生を)図書館に案内すべく検討中である。ただ、図書館の利用教育は図書館だけがやっきになってすむ問題ではなく、学生の身近にいてその研究教育を直接担当されている先生方のご指導が大きな力を持つことはいうまでもない。今後とも先生方のご協力を切にお願いする次第である。

近い目標についてさえ私の認識不足、至らなさは上の通りである。いわんや遠い目標には任を終わろうとしている今も、4年前に比べて一步も近づいていないことを恥じるばかりである。

終わりに、4年間にわたる学内外のみなさんのご指導ご協力を深謝するとともに、全学の良識が選出される新館長のご活躍と、図書館員のみなさんが館長のご指導のもといっそうその使命に徹して努力されることを祈ってペンをおくこととする。

雑 学 雑 想

山 内 博

図書館の係長さんから何か書くようにと言われた。私は、図書館委員であった当時、教養部学生用図書として、筑摩書房の現代日本文学大系の購入を推したことが、今回ご指名をいただいた原因ではないかと考えるので、このことについて雑感を述べて責を果たしたい。

人間の精神活動は「知」「情」「意」の三つを中心とすると言われている。近年の科学技術の飛躍的發展に影響されて学校教育も理数系科目は著しくレベルアップされ、さらに受験勉強で鍛えられて「知」については異常に鍛錬されているのではないだろうか。反面その分だけ「情」の育成は等閑視されているのではなからうかと、日頃感じているのである。しかし大学は本来「知」の育成を目的とする場であるから、大学の図書館ではいわゆる専門書に限定されるのは当然の成り行きである。その結果、とくに教養部の学生には近寄り難い感じを抱かせるのではあるまいか。教養部用の図書ならばいわゆる雑学用図書があってもよいのではないかと考え、その第一歩としてあえて現代日本文学大系を推した。

戦前の高校は、学校の勉強はさておき、いわゆる雑学を怠る様な者は高校生にふさわしくないという様な雰囲気であった。少なくとも私はその様に感じていた。だから「三太郎の日記」「愛と認識との出発」から始まって、「善の研究」で難解に苦しんだ。そのうち河合栄治郎「学生と読書」が出て必読書のリストが出ていたが、我々のいわゆる

雑学書を集大成した様なもので意を強くして雑学に励んだが、焦躁と自信喪失を深めたに過ぎなかった。数年前、元東大教授の戦中日記に「大学で八紘一字の話をしたら、皆ゲラゲラ笑い出したので中絶した」とあった。太平洋戦争直前の暗い谷間の時代で、死を見詰めながら無力に生きていた世代であったが、雑学に鍛えられて八紘一字を冷笑する「非国民」に育っていたことは確かである。

これも数年前、石坂泰三氏はテレビ対談で「自分の受けた教育で、大学の教育よりも高校の方が有益であったと思う。大学で学んだ法律はその後変遷したが、高校の教育は人間教育そのものであったから」と語っている。私の言う雑学はすこぶる広範囲であるから、どれ程の時間と金があっても消化し尽くせるものではない。石坂氏の言う如く「容易に移り変わるもの」は敬遠し「移り変わるもの」のみを精読すべきである。少なくとも10年20年の時間の陶冶に耐えて生き残ったいわゆる古典は、少なくともその期間移り変わることに少なかった証拠であるから、図書館でこれらの古典に目を通し、そのうち繰り返し精読する意欲の湧いたもののみを購読することを薦めたい。本は一般に高価であり、また他の物と違って耐用年数がないという特質がある。現在一般に我々の住居は狭少である。蔵書によって住居生活を破壊されている例はしばしば見られるので、これを避けるためにも図書館の活用と古典の精読主義をすすめた。 (工学部教授・熱工学)

「鈴鹿文庫」の設置について

一故 鈴鹿三七氏蔵書が図書館へー

小 泉 道

とくに文系の学問研究において、文献が必要欠くべからざる資料となることは言うまでもないが、本学のような戦後設立の地方大学においては、古写本や板本類などをはじめ、総じて収集資料が乏しい。そのため(私どもは資料調査に随時各地に出かけざるをえないなど)研究上・教育指導上に不便なことが多々ある。(近年文献複写技術も進み、サービス面も良くなったとはいえ、

何といっても身近に原資料が有るとありがたい。)長年のこんな渴望がいやされる文献一揃いが、このほど本学の図書館に入ることになった。

京都市の故鈴鹿三七氏旧蔵書約7,400点がそれである。鈴鹿家は、中世以降うらべ卜部神道を引き継いできた京都の吉田神社の社家で、江戸後期の鈴鹿連胤つらたねのような、当時の文学者や国学者と広く交渉を持った学者を生んできた。連胤の4代あとが三

七氏で、京都大学で国文学を専攻して皇学館教授などを歴任、関西の書誌学の開拓者と称されて関係著書も多く、昭和42年に79歳で逝去。その夫人が元本学図書館長井手淳二郎先生の令妹に当たるという縁もあって、その蔵書が本学に一括購入（一部寄贈）されることになり、これを「鈴鹿文庫」と称することになったのである。ここで、鈴鹿家のご好意と、関係方面との折衝や資料整理などの諸準備に尽くされた各位のご努力に対して、心から謝意を表したいと思う。

当文庫の蔵書は各種の資料から成っているもので、便宜上これを5分類して示そう。

1. 神道・国史関係では、卜部神道の家系なるがゆえに質量とも揃い、「日本書紀」の写本や板本は特筆に値する。「古語拾遺」「中臣祓」しかり。「日次紀事」は天下の孤本として貴重である。
2. 和歌関係では、連胤らと親交のあった香川景樹や小沢芦庵らの自筆歌集をはじめ、板本も明治以降の歌集なども豊富。
3. 物語・小説・日記随筆類としては、源氏物語・方丈記・徒然草・近世小説などの写本や板本をはじめ、注釈書や複製本も多い。
4. 書誌学関係では、旧蔵者の専門なので、基

本的かつ精選された文献を収め、本人が各資料にその伝来や関係資料を付している点、今後の研究に役立つ。

5. その他、国語学・外国語訳日本文学・書画・伝記・地誌のほか雑書類や、矢野玄道ら伊予の学者の写本類もあって、今後の研究に待つべきものも多い。

このように、国文学を中心に多くの学問領域にわたる種々の資料が蔵されている。

さて、総計7,432点にのぼるこれらの資料は、図書館内に「鈴鹿文庫」としてこれを設置し、一括別置されることになるが、目下、資料の整理と完全な目録作りの段階にあり、図書館の方々と各学部の国文関係教官がこれに協力している。それと購入・寄贈の手続きの完了とを待って、閲覧利用は54年度になる予定。学内はもとより、広く一般の研究者にも公開すべく、目録の印刷や貴重書のマイクロ化（国立国文学研究資料館に保存利用）も進めることになろう。

以上、当文庫の設置は、本学における研究・教育上に有益であるばかりでなく、地域にも学界にも資する所多大なものがあると信じる。公開までいま暫くお待ちいただきたい。

（法文学教授・国語学）

貧乏学生にとっての図書館

理学部 物理学科 3回 山 田 孝 和

後期試験をま近にひかえた日曜というものは、案外能率の上がらないままに下宿の窓に夕闇が迫ってくるものである。しかし、今日は休日開館のおかげで実験のレポードだけは見通しがついた。

理学部の教官には「一科目に対して一冊実力より少し上の本を買って、他のさまざまな本の助けを借りながら、その一冊をものにせよ」と言われ、自らもその勉強法（おそらく文系の人には適用できまい）で一応努力だけはしている。我々貧乏学生にとってはその「援書」を図書館以外に頼るところはない。研究者をめざすくらいの人なら、「自分の知りたい情報を見つける技術を身につけ、図書館の虫」と言われるくらい利用すべきだろう。

でも図書館はそういう情報入手だけでなく、自習室としての機能も兼ね備えている。誘惑の多い環境の中にある意志薄弱な我々にとって、図書館

は最高の勉強部屋とも言える。

これら2つの機能の利用者として、図書館への要望を、遠慮なく述べさせてもらおうと

1. 午後7時閉館というのは辛い。専門課程へ行くと朝から5時まで講義があり、それからクラブをすると、もう図書館を利用する時間が全くない。アメリカの大学図書館では深夜まで開いているとか。もちろん管理に難しい問題があるうが、照明、冷暖房費の節約を工夫し、自習室としてだけでもよいから9時頃まで利用したい。
2. 書庫の図書を公開して欲しい。自由閲覧にすると本の配列がめちゃめっちゃになるだろうから、1週に1回公開日を設けるなどして眠れる書物を生かして欲しい。
3. ただ広いだけの2階自由閲覧室は集中しにくく、騒がしくなりがちであるので、机の上にし

きを置くとか、部屋を分けるなどして欲しい。またくつろいで話ができるコーナーも必要だと思う。集中と息抜きの巧みな入れ換えが効率のよい勉強につながらと思う。

冷暖房完備、新聞代も節約でき、希望図書も買ってくれる便利な図書館だ。利用者が積極的に意見を述べて、より充実していくことを望む。

司書講習を受けて

法文学部 文学科 3回 八 束 共 子

昨年夏、親しい人に勧められたことがきっかけで、司書講習を受けました。それまでは、図書館で働く人を、司書と呼ぶことさえ知らなかった私ですが、講習を受けて規定の単位を取れば、司書の資格を取ることができ、日常の学習活動や図書館を利用する上でも、大いに役立つと聞いて、受講しようと思いついたのです。その時の体験や感想を簡単に書いてみます。

この講習は、全国数か所の会場（大学）で、文部省の委託によって行われており、夏季講習の他に通信制もあるそうです。中四国は、広島文教女子大学で開講されました。広島市内中心地から、バスで50分程の静かな町にある大学です。7月13日から9月6日までの約2か月間、大学内の仮宿所で生活し、講習を受けました。受講者の多くが大学生、その他に、大学を卒業した人や、公共図書館や学校図書館に勤めている人も何人かいました。図書館に勤めている人たちは、講習が終われば即実践ですから、とても熱心でした。

日曜日を除いてはほとんど毎日、90分授業が4時間。現役の大学生とはいえ、暑い盛りでもあり、初めはどうなることかと思いました。授業は集中講義形式で、1科目毎に試験がありました。資格を取るためには、19単位必要なのですが、受講できる科目も19単位ちょうどですから、1科目でも落としてしまうと、また次の年に取りに行かなくてはならない訳です。緊張の連続でしたが、それだけに、一つも落とすまいと思い、充実した毎日を過ごすことができました。

授業は14科目で、図書館通論、図書館資料論、資料分類法、資料目録法、参考業務、図書館活動など、講義が11科目、そのうちの分類法、目録法、参考業務については、演習がありました。これらの授業の中には、図書館見学が組み込まれていて、広島市立中央図書館と、広島附属図書館本館とを見学することができました。最も印象に残っているのは、三つの演習です。それぞれの講義

で学んだ理論的な事項を、実際の作業に応用してゆくのです。分類法では、NDCに照らし合わせて、図書の分類番号を決め、目録法では、カードに必要な事項を記入して、目録を作りました。

一見機械的な作業のようですが、題名だけでは図書の内容がわからないことも多く、図書の形式も単行本、全集、双書など色々あって、1冊の本を分類し、目録を作ることがどんなに大変な仕事であるか、よくわかりました。

参考業務とは、愛媛大学の図書館では、参考調査係の仕事です。図書館の種類によって仕事の内容は多少異なるのですが、利用者と図書館の資料とを結びつける働きは同じです。この演習では、いろいろな設問に対して、解答を探したり、どんな資料に当たったらよいかを調べました。ここでは、百科事典、辞書類、年鑑、白書など、多くの参考図書に接することができました。日常の疑問解決に大変役立っています。

講習を受けて、日本の図書館がまだまだ発達段階にあり、一般に定着していないという事を知りました。日本人は、本を借りるよりも買ったがる傾向があるのだそうです。それは図書館が十分に蔵書を持たず、利用できる地域が限られているから……ということにもなるでしょう。

図書館界には色々な課題が横たわっているようですが、公共とか学校とかの区別なく、それぞれがもっともっと発展して多くの人が利用できる様になると思います。そして、愛媛大学の図書館もより多くの資料と設備を備えて、私たちの頭脳センターとして機能してくれることを望みます。

司書講習は、毎年行われるそうです。資格を取っても、ただ資格があるという事に過ぎないのですが、図書館の仕事、組織などいろいろ勉強できて、有意義な夏休みを過ごすことができました。図書館の仕事に関心のある人は、講習を受けてみて下さい。

医学図書館（新築）平面図

医学部（重信地区）図書館完成予定のお知らせ

昨年9月から建築中の医学部図書館は、次の予定でお目見得することになりました。

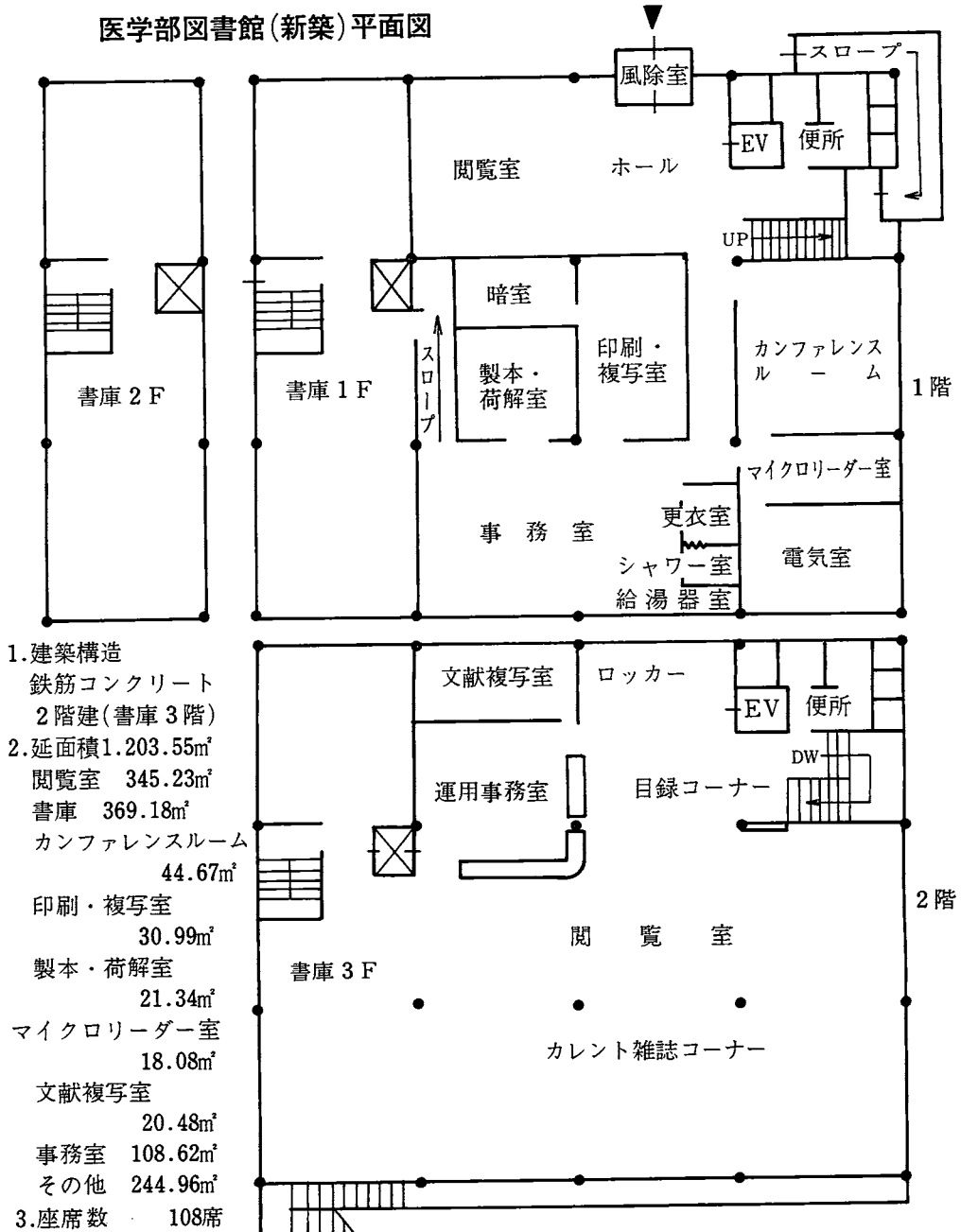
いずれ開館の節には、くわしくご案内することにいたしますが、精々ご利用下さるようお知らせいたします。

竣工 53年3月末日

移転 53年4月上旬の予定

開館 53年4月中旬の予定

医学部図書館（新築）平面図



〈文章・表現・文体〉研究のために

糸 井 通 浩

新たな文体探求 昭和49年5月愛媛大学で、注目すべきシンポジウムがもたれた。テーマは「文体はいかに生成されるか」であった（第11回表現学会全国大会・内容は「表現研究」第20号に収録）。それは「文体」とは何かを根本から問い直して、文体論研究の停滞と混迷から脱皮しようとする気運の現れであった。

「文体」（styleの訳）、その歴史的根は古い。日本でも文（歌）の体の自覚、文体なる語の発生とともに近代以前に遡る。しかし、文体を論ずるに、100人の論者に100の文体の定義の状態が今なおつづき、当然、文体論研究も方法論的に確立されていないと嘆かれもする。が、近年増々、文学の創造・享受の両面で「文体」は重要な概念として認識されてきている。作家による文芸誌「文体」の創刊、文章読本ブーム、雑誌の文体（論）特集等々。

文は人なり この句はビュッフォンの演説「文体論」から生まれた格言で、高山樗牛も「文は人也」と用い、日本では早くからこう訳されている。しかし、「文体はすなわち人間である」（P・ギロー『文体論』佐藤信夫訳・演説での表現は「文体は人間そのものである」となっている）と訳されもする。

後者の方が現代語では適訳であるようだ。そして文章には書く人の人柄が反映する。という一般的理解よりは、もっと深い意味をもった句であったこともわかる。つまり、文体の自立性を言っているのだ。最近の文体観を加味して私なりに捉え直すと、文体は完結した統一体—生命体—人間そのものである、と考えてみたい。そして、文体が自立するのは、まさに読者と立ち向かった時である。読者によって自立した文体は、存在しうるのだ。外山滋比古『近代読者論』など、読者の自立が説かれることに至ったことも、このことと関係があるといえよう。

比喩的にいうならば、作品は作家の影ではなく、作家が作品の影である、という逆転が近代においては生じて来ている。

「何を」「如何に」1つの統一体としての文学作品をいかに総体的に把握するか。これまでの我が国における、文芸批評文学評論が印象批評にとどまっていることに対する反省がある。その印象も、表現やその論理に密着して立体化される必要があった。ただ性急に「何を」を求めるのではなく、「如何に」表現しているかが重視されねばならない。書き手は作品で何を書いたか、よりも、作品がどう読めるか、どう読めるように作品は書かれているか、である。そこに「読むこと」の徹底が要求されてくる。読む主体の確立がすぐれた文体研究の確立を保証するといつてよい。

時枝誠記は「文学は言語である」とまで言ったが、読むことの徹底には、言語に対する理解が基礎となる。一般言語学、意味論、文法論、語彙論、文字論等々に学ぶことは多い。言語感覚、言語観が文体論の有り様を左右するといえるのである。

研究の領域 文体の研究は様々な視点を生み出してきた。裾野はどんどん広がっている。文体論といわれるものにも、パロールの文体論（個々の文学作品の個性性の研究）とラングの文体論（個を超えた普遍的特質の研究・「文章体」と称すべし）という対象の区別、文学的文体論と語学的文体論という方法的区別をはじめ、学問的文体論、評論的文体論、美学的文体論等々規定されるものがある。

時枝が文章研究の名で、文法論の延長に文章の成立を究めようとする領域を切り開いたが、それは文章論として定着した。この文章研究と文体研究との間に位置するように表現論—表現研究がある。木坂基『近代文章の成立に関する基礎的研究』でこの（文章・表現・文体）にわたる上記の研究史が概観されている。

ちなみに、木坂は、愛媛大学での表現学会の大会報告をまとめた。私が愛媛大学に足を踏み入れた最初が、この大会参加のためであった。

（法文学部助教授・国語学）

お 知 ら せ

○愛媛大学記念文庫について

本学図書館では、開学10周年記念事業として、「愛媛大学記念文庫」の開設を企画、図書館委員会の承認と学部教官の賛同を得て、昭和34年これを設置しました。この文庫の目的と趣旨は、本学教官の著作図書論文等の刊行物を刊行の都度ご寄贈願って、その研究業績の顕彰、紹介と併わせて文庫の充実を図ることにあります。

以来、本文庫は20年近くを経過し、ご寄贈いただいた著作物もその数200冊に近いものになって現在図書館1階の開架室に展示し、利用されております。今後も引続き、なお一層本文庫の発展と充実を期待しておりますので、著作物等ご出版の節には是非とも1部ご恵贈賜りますよう、改めて本文庫をご紹介申し上げ、ご協力をお願い申し上げます。なお、ご寄贈いただける場合は、受入係までご連絡いただければ幸甚です。

最近本文庫にご寄贈いただいた著作図書は、下記のとおりです。(1976~77年発行の分)

- 白方 勝 白水雑記 いたどり 青葉図書 1976
 和田茂樹 松山の文学散歩 法文学部国語国文学研究室 1976
 浅海 忠 蘇山ノート 浅海 忠 1976
 浅海 忠 蘇山作品集 退官記念事業会 1976
 モーガン、E. S. 著
 三崎敬之訳 合衆国の誕生
 (新アメリカ史叢書3) 南雲堂 1976
 北沢清先生退官記念
 論集刊行委員会 民主主義と教育 1976
 武智雅一 熟田津乃歌私考 藤井 滋 1977
 江頭 暁 液体クロマトグラフィー理論と実際
 三共出版 1977
 江頭 暁 液体クロマトグラフィー機器と分析
 例 三共出版 1977

○学生希望図書の購入について

本年度学生諸君の希望で中央館に購入した図書は約30冊です。今後も希望図書がありましたら、閲覧係までお申し出下さい。

○定年退官の教官および卒業生の図書館利用について

定年で退官された(本年3月で退官される方も含めて)教官で、退官後も本学図書館の利用を希望される方は、特別利用証を発行いたしますので、ご遠慮なく閲覧係までお申し出下さい。

本学卒業生で卒業後も図書館を利用したい方は、本学教官の紹介状、身分証明書を同係まで持参の上お申し出下さい。

○入 館 状 況

年を追って図書館への入館者が激増しております。昨年4月1日から本年2月28日までの入館者延べ数は下記のとおりです。

開 架 室	256,443人	計 458,959人
一般 閱 覧 室	202,516人	

※1日の入館者数 最高 6,000人。平均 1,600人。

○和文雑誌目録の配布について

前号の図書館だよりでお知らせいたしました、愛媛大学所蔵の和文雑誌目録(昭和52年8月1日現在)が、各研究室のご協力を得て予定どおり3月末日までに刊行出来る見通しとなりました。

4月初めには各学部(講座・学科目に1部あて)に配布いたしますので、精々ご利用下さい。

編 集 後 記

長かった冬も終わり、待ちに待った春がやってきました。図書館だよりをご愛読くださっている教職員、学生のみなさもお変わりありませんか。

みなさまのあたたかいご協力をいただきまして、ここに図書館だより第4号が出来上がりました。

蒲池館長の肝入りで発刊をみましたこの図書館だより。号を重ねるにしたがってより一層内容充実したものになりますように、私たち編集子一同頑張っております。

今後ともよろしくお願いいたします。

愛媛大学附属図書館報「図書館だより」

第4号 昭和53年3月15日発行

発 行 愛 媛 大 学 附 属 図 書 館
 松 山 市 文 京 町 3 番
 Tel 0899-24-7111